空飛ぶクラゲを追い求め

秋吉君

空飛ぶクラゲを追い求め、とうとう海までやって来た。あれを最初に見たのは、いつだったろう？

小学生のころ、リトルリーグで俺は七番打者だった。地区大会三回戦、一点ビハインドで迎えた九回裏、ツーアウトランナー二塁三塁。俺自身諦めかけていたの だが、目を瞑ってフルスイングしたバットの真芯にボールがあたった。雲一つ無い青空に綺麗な弧を描きながら白球が飛んで行く。わっと歓声が上がる。俺はセ ンター方向の空を見ていた。何かが浮かんでいる。
「なんだろう、あれ？」
突っ立ったままの俺に向かって、早く一塁へ走れと監督が怒鳴った。

その日から、俺に幸運が訪れるとき、空には決まってクラゲが出現した。
俺にしか見えないらしいその物体は、半透明でゆらゆらと空を浮遊していた。形は子どもが描くタコのような火星人そっくり。自分の位置からどのくらい離れて いるのか不明だったので、大きさは分からなかった。一度、自転車で追いかけたことがあるが、どこまで行ってもクラゲは一定の距離を保っていて、距離は縮ま らなかった。

クラゲがもたらしてくれる幸運は、ほんのちょっとしたラッキーが多かった。一つの転機にはなり得るけど、決定的とまでは言えないツ キ。野球で決勝打を打つとか、試験でヤマが当たるとか、好きな子からバレンタインデーにチョコをもらうとか……。第二志望の大学の合格発表日にも、寒空に 漂うクラゲを見た。

上京して下宿を探しに不動産屋を訪れた日。選んだ物件を見に、アルバイトの女の子と一緒にアパートの空き室へ入った。松中有 里華は、長身で肉感的な短大生だった。
「いい部屋じゃないですか？」
「日当たりが今ひとつかな」
そんな会話をしながら、少しずつ距離が縮まり、俺たちは抱 き合った。有里華は抵抗しなかった。何も敷いていないフローリングの床に押し倒し、下着を脱がす。背中が痛いと言うので、体勢を変えて俺が下になった。 カーテンのない窓の向こうに薄っぺらい空があって、やはりクラゲが漂っていた。

我ながら目立つ顔立ちでもないのに、キャンパスでも、バイト先で も、合コンに行っても、不思議と俺は女にもてた。三年生になり、友人達が就職活動で苦労している中、俺だけ早々に広告代理店から内定を貰った。
きっと、調 子に乗っていた。常に女に囲まれ、将来はまずまず安泰。
ある晩、酔わせた有里華に目隠しをして、三万円で友人に抱かせてやった。俺はビンテージのジーンズ が欲しかった。友人の話では、途中から有里華の目隠しが外れたが、彼女は終始無表情だったそうだ。

あれを最後に見たのは、いつだったろう？　思い出せない。
クラゲがもたらしてくれるのは、きっかけにすぎなかった。俺はクラゲが与えてくれたきっかけを、ことごとく無駄にしてきた。空飛ぶクラゲの存在は謎だが、 そんなことはどうでも良い。要所要所でツキが俺に味方してくれて、平均以上には幸福な人生を送ることができるだろう。根拠のない確信を持っていた。
甘かっ た。俺は努力をしたり我慢をすることができない人間になっていた。
有里華と別れた後も、何人もの女と付き合ったが、長続きしなかった。就職した広告代理店 は、イメージと違って体育会系の泥臭い職場だったから、半年でやめた。その後も職を転々としたが長続きしない。いつしか周りから女も友人も去っていた。原 因は借金だったり俺の短気による暴力だったり……。
とうとう金も人脈も底を尽き、アパートを追い出された。

空飛ぶクラゲを追い求め、彷徨いながら、海にたどり着いた。
砂浜からはとっくに夏が過ぎ去っていて、潮風は肌を刺す寒気を含み、海面には大量のクラゲが浮かんでいた。
裸足になって海へ入ると、ゆらゆら漂うクラゲを片手ですくった。ぬるりと冷たく、鼻を近づけると生臭い。ぶよぶよ頼りない物体をぎゅっと掴む。
「この野郎！　飛べ！」
叫びながら放ったクラゲは、暮れゆく空に緩やかなカーブを描きながら飛んで行った。目を閉じると、風の中に少年の日に聞いた歓声を感じたが、一瞬のこと だった。ぱしゃん、と水風船が爆ぜるような情けなく小さな音が、案外近くで聞こえた。
……そうか。俺がきっかけを無駄にしてしまう度に、クラゲはこんな風 にして空から落ちて行ったんだな。有里華の横顔が瞼の裏に浮かぶ。酷いことをした。有里華の目隠しが外れたときも、ぱしゃん、という音がしたのだろうか。
俺の空には、もうクラゲはいない。腰まで海水に浸かりながら、立ちつくした。
空から落ちた無数のクラゲが、音もなく漂っている。

了

空飛ぶクラゲを追い求め

http://p.booklog.jp/book/37884

著者：秋吉君
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/akiyossy/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/37884

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/37884

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.